

〈論文〉

アクティヴ・ラーニング  
大学教育のなかの「開かれた学びあい」をめぐる  
ナラティブ的探究 (2)  
— 学生との家族をめぐる対話から見てきた「新しい物語」—

荒 木 奈 美

1 「語りはじめた」学生たちとの出会い —本研究の出発点を確認する

夕方になると毎日聞こえる、サイレン。「おうちへ帰ろう」のサイン。毎日同じ時間に鳴るその音を合図に、子どもたちは三々五々家路につく。でもいつでも遊び足りなくて、名残惜しくて、別れ際にまた立ち話して笑い転げて、気づけばまたもお母さんとの約束の時間を破ってしまう。そして今日も変わらず、お母さんに怒られる・・・

andymori の1984 という曲の歌詞には、そんな幼少期の郷愁をともなった風景が出てくる。大学生になって毎日目的もなくおとなしく講義を聞いている日々に、幼少期のわけもなく動き回って暗くなるまで夢中になって遊んでいた日々を重ねながら、この歌詞の中の「僕」は何を思っているのだろうか。

小学生の女の子が弱い男の子を執拗にいじめるシーンを取り上げて、子どもたちが人知れず抱えている心の叫びについて問いかける授業<sup>1</sup>。この授業回の最後に私<sup>2</sup>がこの曲を流

---

1 臨床教育学入門—受講生の過去の実験を振り返りつつ現代の教育問題について考えることを目的とした、初年次教育指向の講義科目である。毎回200名程度の学生が受講している。この授業回ではテレビドラマ『ハガネの女』season1 第2話を取り上げ、小学校で繰り返された子どもたちのいじめ問題に触れた。この回の中心人物となるれもんという女の子は、家で大人たちの言いつけを守り聞き分けのよい娘であることを求められて人知れず抱えてしまったストレスが、教室の中での辛辣ないじめ行為としてあらわれていた。

2 行為主体である私のナラティブに着眼し、その解釈によって見出される新たな気づきを知として認めここに意味づけをしていくナラティブ・アプローチのスタイルを取る本研究の性質上、本稿では筆者の言説をすべて「私」として一人称表記し、「～かもしれない」などという不確かな感覚や、その後の「わかった」という気づきとセットでそれがすぐに「やはり違っていた」と覆ってしまう心の揺らぎもすべて書き留め、この「私」の変化を対象化している。

した<sup>3</sup>理由は、授業を受けている学生たちへの、授業者としての、言葉にならない思いを込めたメッセージでもあった。子どもが大人の言うことを守らないのは、かつては子どもたちにまつわる何の変哲もない、ごく日常の光景ではなかったか。大人の期待を裏切るのが、子どもの仕事。大人たちはいつでも言うことをなかなか聞かない子どもたちに頭を悩ませながら、その経験の中で少しずつ子どもたちと折り合いをつける術を学び、やがて親としての信頼を勝ち取っていく。子どもたちもまた、大人に対する小さな反抗を繰り返す中で、少しずつ、許容範囲の線引きを感覚的につかんでいく。何よりそういうやり取りこそが社会に出てからの人間関係の重要なヒントにもなるだろう。「大人の言う通りに生きない」ことは、ある意味において「人間」としての成長に深く関わることでもあるに違いない。

ところが実際に授業でこの話を取り上げてみると、今の学生たちは、驚くほど親や教師に反抗をしてこなかったということに気づく。授業の中で実際に学生たちに聞いてみると小さい頃「5時に帰ってきなさい」と言われたら悩まず忠実にその言いつけを守ったという学生が大半であった。仮に親から怒られることがあっても、たいていはすぐにごめんなさいを言って反発もしない。これもまた少数派ではないようだ。ある学生にその理由を訊ねてみると「どうせ言っても倍になって返ってくるだけだから諦めた方が賢い」のだと言う。

争いのない社会、というと確かに聞こえはよい。しかしながらここで問題なのは、それで本人が納得してきたわけでは決してないということである。そして授業の中で問題点を指摘し、自らを振り返り、そこで実際に起こったことや感じたことを語るようになってはじめて、自分が経験してきたさまざまなことがらには、もしかしたら苦しみの「根源」があったかもしれないということに気づく、ということである。

実際にこの授業回に限らず、「語りはじめた」学生たちのレポートを読むと、親や教師、アルバイト先の上司などの大人たちに理不尽な思いを抱くも、そのわだかまりは必死に自分の中に溜め込んで「爆発」しないように堪えて生きてきた、生々しい姿がかいま見える。「爆発」してしまったケースもたびたび報告される。抱え込んだ思いがストレスになり、蕁麻疹や腹痛など、身体症状に現れている学生はことのほか多い。親に認められない虚しさが、小中学校時代にいじめたりいじめられたり、学校の中の人間関係でそのストレスを

---

3 当該授業では、毎回授業の終わりに授業内容を象徴する曲を選び、学生と共有する。音楽はメロディとリズムと歌詞が合わさり、言葉にはしがたい何らかの情動を含めて授業内で表現する一つ的手段と考えている。授業は15回を通じ連続した内容であるが、授業者として伝えようとしている内容は毎回独立している。その思いを伝えるためにこの仕掛けは有効という実感をもって臨んでいる。授業を受けている学生の中には、非常に深刻な教育体験を持つ者も少なくない。授業者としてその思いの中には、たとえばいじめ問題のような重苦しい内容を終えた後に、暗い洞窟からゆっくり抜け出して光を見つけるような気持ちで、少しでも穏やかな心向きで教室を出て行ってほしいという気持ちも込めている。

発散しようとしてきた経験とつながった学生もいる。夜な夜な自分の身体を傷つけることで自らの生を実証しようとしてきたことを告白した学生は、自らを語りはじめてようやく、その原因は自分が生きている価値のないダメ人間だからではないということに気づく。

語り方にはさまざまな形があるが、私はここに学生たちが、語りはじめてもお自分で気づいていないかもしれない深刻な「歪み」を見る。そしてその多くの要因は改めて、学生たちをとりまく、親をはじめとする「大人たち」にあると考える。次の学生の言葉は、先の授業回の終わりに受講者の中から出てきた感想レポート<sup>4</sup>から抜粋したものである。

私は今回の授業を聞いてとてもすっきりしました。中学の最初の定期テストで思ってたとおりの点数が取れなくて母から怒られ、次の日蕁麻疹が出たことがありました。しかし原因が自分はわからなくて、もやもやしたまま体の症状は食欲不振やめまいなどがひどくなってきました。今回の授業で母に認められたいためにももしかしたら勉強をしなければならない、結果が全てとどこかで思っていたために、自分を苦しめていたのかとわかりました。A

私の親は私が小さい頃、手のかからないよい子だったと言います。ですが小学生の頃、私は友達と一緒に同級生にいじわるしたり、近所の子にいじわるしたりしていました。今までは性格が悪かったな、なんであんなことしたんだろうと思っていましたが、もしかしたら私もれもんちゃんと同じように、よい子でいるストレスのはけ口としてやってしまっていたのかもしれないと思いました。私は「あなたはできる子だから」と育てられたので、できないことがある、わからないことがある、という状況がすごく恥ずかしいことだと思いついていました。知ったかぶりしてかっこうつけて、いっぱいいっぱいになって、自分で自分の枠を作って出られなくて、苦しくて… そんな中でなんだかよくわからないままいじめられ、教室に入ろうとすると手足がふるえるようになり、不登校になりました。昔の悪い行いが自分に返ってきたのだと思いました。今日聞いた曲のように、小さい頃は自由だったとはあまり思いませんが、親や自分の枠から出られそうな今は、社会的な枠の中に閉じ込められている感じがします。B

中学生の時は思っていることが言えず、ためてためての繰り返しで、どうしていいかわから

---

4 授業では、毎回の授業終わりに提出する15回分のレポートを一つの冊子としてまとめ、ポートフォリオ評価を採用している。同時にすべての授業を終えた後に、授業者も学生も全体を通して一人ひとりの感想を読めるよう配慮している。一方で他の学生たちとの意見交流を目的として毎回の授業では、あらかじめ掲載許可を得たレポートの中から10件程度の文章を抽出し、無記名で学生たちに紹介している。

ずそれこそ感情の波が闇になっていくような状態でした。目に見えるものが敵に見えて、なめられないようにとがって、疑うことばかり覚えていった。学校が終わるのを待って、適当に過ごして、たまに死にたいか思ったりしながら泣いたり。何にも熱狂できずに過ごしていたあの頃の自分が聞いたら 1984 は明るすぎて、耳に入れたくなかった。たぶん、それぐらい明るい曲にこの曲は聞こえた。C

このような感想と出会うにつけ、学生たちの教育体験の中で、何をおいても「大人たち」の影響がいかに大きいのか、私も一人の大人として言葉を失う。個人的に最近とみに感じる問題は、親たちの過度の期待に子どもたちが過剰反応をしてしまう B のようなケースである。まだごく狭い世界の中で生きている小学生くらいの子どもたちは、自分の「世界」において判断基準が少ないだけに親から与えられた「評価」がすべてになってしまうのかもしれない。「あなたはできる子」という「評価」は、それがその子にとって身にあまるものであった場合、気づけば「できる子でなければならない」という呪縛に変わってしまう。いつでも親の期待通りになる子どもは、その呪縛の中で懸命に期待通りの「よい子」であり続けようとする。その過程の中で、「本当はできる子なんかじゃない」という思いと親の「評価」のギャップに苦しみ、人知れず声にならないストレスを溜め込んでいく。外に吐き出せない心の叫びを溜め込んでいくからくりは、A や C の感想にもはっきり現れている。「本当はこう言いたい」思いを言えずに抱え込み、誰にも聞き取られないまま生きてきた子どもたちが思いのほか多いという事実には立ちすくまざるを得ない。言えなかったことは「なかったこと」にはならないのだ。それは子どもたちのどこかに溜め込まれ、やがて何らかの問題が生じたときに身体症状に現れたり、問題行動として現れる。もしかしたらそのような子どもたちの周囲にいる大人たちは気づかないまま能天気子どもたちを上手に育てている気になっている。もしもそのような構図が一つの現実だとしたならば、私も一人の大人として、自戒を込めて振り返らずにはいられない。

そしてそのように考えるようになったとき、私にとってはようやく、一人の研究者として、自分が今すべきことが見えてきた。

たとえば授業外に直接学生たちと接してたびたび感じる「よそよそしさ」は何だろう。身体的に関わっている感じがまったく持てない学生も少なくない。竹内 (1975) の言う「人間と人間とがふれあう」段階どころか、「他者」として現れてすらいらないという感じがあ

る<sup>5</sup>。「人」として出会えていないのだ。しかしながらこれは考えてみればつまるところ、「大人たち」の問題でもある。私を含め多くの「大人たち」自身がそもそも人とそのようには関わっていないのではないか。その姿を見て育った彼らであるからこそその現象なのではないか。つまりこれは、私を含めた「大人たち」の問題にほかならない。私たちが学生たちと一人の「他者」として関わる構えがない以上、学生たちの言葉にならない思いを聞き取ることはできないだろう。

そのことに気づいたとき、私は改めて自分自身の「矛盾」に行き当たる。結局私は、授業の中で学生たちの苦しみに気づいていながら、彼らの前でしたり顔で「それは大人の問題だよ」などと言いつつ、私自身がいまだに学生たちのその思いを受け止めきれない。私自身が一人の「他者」として学生の前に立つ覚悟ができていないのだ。その身をさらそうとすらしていない。そしてこの気づきを経て、私自身がこの前年に別の思いではじめた研究<sup>6</sup>と、ここでの直感的な思いがぴったりと重なった。

竹内がその身とともに獲得したような仕方では、大教室ではなく研究室で、直接学生たちと出会ってみたい。彼らと時間をかけて言葉を交わし、吐き出せなかった思いを聞き取ってみたい。その上で私が聞き取れた言葉を共有したい。それは私自身もそうだったからに他ならない。若かったとき、自分の思いをぐっと飲み込んで、なかったことにして生きてきたという自覚がある。その時はそれでいいと思っていたが、学生たちと同じく、そ

---

5 竹内（1975）は、人が「他者」の実在感を獲得していく段階（からだが劈いていく段階）として6段階を想定している。ここで「人間と人間とがふれあう」段階とはそのなかの第4段階に当たり、ここでは自分も相手も一つの主体としてそこに現れ、自分の動きと相手の動きが共鳴しあっている。「他者」として現れる段階とそうでない段階の違いは、鏡の中に自分の像を見つけてそれを対象化できるか否かというラカンの言う鏡像段階に至っているかそうでないかの違いと考えると、私が感じる学生たちの「よそよそしさ」とは、相手が自分と異なる個性を持っていることを認めて尊重する姿勢というよりも、自分と考えが異なるゆえに自分自身の延長上に相手を置けないために遠ざけているという印象が拭えない。

6 本稿は当該研究課題の成果の一つとなっている。研究をスタートする当初は居神（2010）の定義に従いエリート養成を第一目的としない大学に特有のテーマと設定して研究をはじめたが、研究会などで出会う他大学の学生のケースも含め繰り返し学生の話を書く中で、大学の中で自らの経験を語ることで振り返り何らかの「生き直し」をする学生の姿は特定の大学のものではないということに気づくようになり、今は広い意味で、大学に通いながら自らの教育体験を振り返る語りの中で自らの物語を書き換えていく姿を現象学的に聞き取る経験を積み重ねている。本稿はその聞き取りの中から、親や教師などの「大人たち」によって自分の思いを「封印」してしまった学生の経験を抽出し、「大人たち」の関わり方がいかに子どもたちに影響を与えるものであるかを強調している。今後順を追って見えてきたトピックスごとに成果を報告していく。

の溜め込んだ思いは自分のどこかに翳<sup>かげ</sup>として心の奥深くに凝<sup>こ</sup>っていて<sup>7</sup>、「大人」になってからもたびたび自分自身を苦しめた。その一つの証として、学生たちがレポートに寄せてくる言葉にこのように過剰に反応してしまう私がいる。後悔の気持ちとともに自分自身を振り返らずにはいられなくなっている。

本稿は、上記の思いをもとにして2017年度より本格的に始めた研究の一環としての経過報告となっている。私自身の授業を受講したことのある学生から10数名を選び<sup>8</sup>、2018年度末の今も繰り返し対話を続けている<sup>9</sup>。対話の内容は一人ひとり違うため、そのアプローチの方法はさまざまである。その諸相は順を追って報告していくつもりであるが、本稿ではその中から親という身近な「大人」との人間関係にまつわる「歪み」に触れた内容を抽出し、対話の中で見えてきた個々人の問題および時代背景、日本文化論的な観点からの気づきをまとめている。具体的には、一人の学生が自己の経歴の中で親や教師の前で見せた振る舞いについて自己対象化した語りから見えてきた問題点を取り上げる。本稿ではこれらを彼らが大人たちの前で自由にふるまえなかったジレンマやもがきとして、エリクソンの定義したアイデンティティ形成にまつわる「危機」としてとらえ、そのつど現象学的方法で聞き取っている<sup>10</sup>。個人の特定を避けるため、デリケートな内容については掲載を控え、複数の学生から受けた内容をまとめて示した箇所があることをあらかじめ断っておきたい。

7 「翳<sup>かげ</sup>」,「心の奥深くに凝<sup>こ</sup>」という表現は森鴎外「舞姫」の冒頭部に出てくるものである。作品の主要人物である太田豊太郎は、出向先のドイツで自分自身の生き方に迷い、結果的に恋人エリスをはじめたくさんの人を巻き込んで内心に生きるか社会的な自己に生きるかに苦しむ。豊太郎が自分でも言語化できないほどに心の奥深いところで苦悩している様子を、筆者は自分の今の姿と重ねている。

8 対象となっているのは、勤務校において筆者の授業を受け本研究の趣旨に賛同し協力を得られた学生である。

9 クランディニンとコネリー (Clandinin, J. & Connelly, M. 2000) は、聴き手と話し手の対話は「協働作業」、その間には共に思いを共有する (spilit) が介在すると考えており、聴き手として私自身最も重要視しているところである。以下対象箇所の本文訳を示す。

ナラティブの探究は経験を理解する方法である。それは研究者 researcher と研究協力者 participants との、ある場においてある環境 milieus のもとでなされた、時間をかけた協働作業 collaboration である。探究者 inquirer はこの作業の中央に位置し、生き、語り、生き直し、語り直す過程の中央に居続け探究の行方を方向付けながら、同じ精神 spilit で個と社会の間で生きる人たちを描いた経験のストーリーを前進させる。(p.20)

10 聞き取りの方法としては、最初に非構造化インタビューの形を取り自由対話でインタビューア (荒木) と対象学生が言葉を重ね、その中から見えてきたトピックスがあれば、改めてその内容に特定して半構造化インタビューの形を取り問題点をクローズアップするという方向で進めている。



## 2 本研究がよりどころとする社会構成主義、そしてナラティブ的探究について

そもそもこの「歪み」はどこから来るものか。「語りはじめた」学生たちの「本当はもっと自由に生きたかったのに」という思いの発現は、本稿が拠りどころとするナラティブ的探究 (Narrative Inquiry) (Clandinin, D. J. & Connelly, M. 2000) による、日本ではまだ主流とは言えない新しい知の体系がもたらした一つの「成果」である。自らを語るというナラティブ行為から、知らずに枠付けしてきた自分自身の生き方を相対化し、自分を縛り付けてきたストーリーの呪縛から自らを解放し、新たなストーリーを語ることで自分自身を再発見するというあり方は、社会構成主義が本質主義の問題点を鋭くえぐった今の時代にこそ、確固たるリアリティーをもって存在しうものと考えている。これは近代日本社会で繰り返し語られ文学主題の一つにもなってきた「自己とは何か」という問いの一つの「答え」にもつながる重要なアプローチでもある。

明治期にはこれからの若者が見出すべきは「近代的自我」として、自らの生き方としても封建社会からの脱却を望んだ歴史があった。自己を問うには少し早すぎた時代の制約もあり「本当に自分が求めている生き方」「他の人には変えられない自分という証」「自分が自分であることの意味」を容易に見つけられなかった「迷える若者」たちは、考えれば考えるほどわからなくなるというからくりのなかで方向性を見失った。漱石の作品に出てくるたくさんの「迷える若者」「『大人』になりきれない永遠の青年」たちがそれを証明しているだろう。この主人公たちが明治大正期の社会に置かれて肩身が狭かったのは、ガーゲンの社会構成主義の考えかたに照らせば、ひとえに「自己」の捉え方に問題があったと言わざるを得ない。そもそも自分の中のどこを掘り下げても、実体としての「自己」などないのだ。すべて「真実」はその人が「そこにある」と信じたからこそ見えてくるものであるならば、語ることで自分として実感できればそれが「真実」であり、それ以上のものではない。「自己」についても同様である。漱石の『こころ』を例に挙げれば、「私はこのようにして生きてきた」という自己語りの中にこそ、「先生」の「自己」は見え隠れしている。

そのようにして考えると、学生たちがそれと信じて生活してきた日々の「我慢」も「現実」も、自分自身の見方が変わればまったく違う相が見えてくる。自分の中で語ったストーリーに納得できさえすれば、それがその人にとって「真実」となる。そしてそれ以上のものではない。誰もが共通して受け取る「真実」がこの世に存在しない以上、大切なのは、自分が語るストーリー、見出した言葉にどれだけリアリティーを感じることができるかである。だからこそ、学生たちが自分のストーリーを語り直すことで自己認識の仕方が変わるとき、学生が「これが自分だ」と認めてきたあり方も変わりうるということになる。

社会構成主義の考えかたについてはまだなお議論の余地がある<sup>11</sup>ということは心得た上で、本稿では一人の学生がそれぞれの過去の体験を語る「古い物語」が、私との語り合いの中でどのように変化し、語らずには気づけなかった「新しい物語」に至るかというところに着目し<sup>12</sup>、それぞれの学生にとっての別の自己認識と出会うまでを独自に定めた方法にのっとり記述していく<sup>13</sup>。インタビューに関しては、エリクソン (Erikson, H. E., 1946) がアイデンティティ危機にまつわる原因分析には複数の視点が必要であることを指摘しており、本稿ではこの視点を踏まえ、私自身は学生との対話において①主体の自我の強弱（個人の生育歴や性向、トラウマ体験などによるもの）、②民族性（封建社会の文化伝統を基盤として自己主張を必要悪ととらえる傾向など）、③時代性（情報化社会極まる時代の中で「本音」と身体感覚が切り離されていく傾向など）の三点を意識しながらの問いかけを試みた。学生との繰り返しの対話は、基本的には非構造化インタビューの形で、学生たちのニーズに合わせて表現アートセラピーの手法を生かした非言語的対話を取り入れながら自由対話を続けている<sup>14</sup>。その上でこの中でさらに深めたい論点が出てきた段階で、別時間を取り半構造化インタビューを試みるという形をとっている。インタビュー分析は西村 (2014) の現象学的方法を援用した<sup>15</sup>。繰り返しの対話はこの後も続いているため、今回の「成果」はあくまでも一つの通過点であるということは書き加えておきたい。クラン

11 ガーゲン (Gergen, K. J., 1994) によれば、「語りは『そこにある現実』を作りこそすれ、反映などしない」とある (p251)。この考えに懐疑的な人たちは、語りから事実を作り出すことはできないと考えるが、社会構成主義を主張する立場からすれば、ここで見出しているのは言説を通じて見えてくる「関係性」、「構造」であって「事実」ではない。自己同一性について言えば、自己同一性とは言説の中で見出されたその人の関係性の総体であって、そこに自己同一性の実体があるわけではない。

12 本稿では野口 (2002) の定義に基づき、対話者が語る最初の語りの内容を「古い物語」、対話の中で書き換えられて認識の変化を経た内容を「新しい物語」として表記する。

13 荒木 (2019) でも示している内容であるが、本稿もその一部となっている研究主題の中で定めている方法をとっている。筆者はクランディニン (Clandinin, 2000) が提唱するナラティヴ的探究の立場から、語られた言葉に依拠しそこから見えてきた意味から見出された知 (「ナラティヴ知」) (荒木 2016) を求めることを目指しており、本稿でも極力経験の中で自分自身が感じたことをその時の感情そのままに描き出すことが肝要と考えた。そのため記述の方法としては鯨岡 (2005) のエピソード記述、キーン (Keen, E. 1975) の現象学的方法を参考にし、最初に感じた印象や不確かな感じ、自分の中で同時に芽生えた相反する思いとしての揺らぎなどもそのまま現れるような表現を心がけた。本文の中で筆者自身を「私」と表記するのも、その思いがもとになっている。

14 表現アートセラピーについては、荒木 (2019) で詳しく報告している。

15 西村 (2014) の記述方法が筆者が明らかにしたい研究成果のために有効と思われるのは、最初のインタビューで語った内容を振り返り、その振り返りの内容から次のインタビューテーマを定めていくことで一つの内容をじっくりと深めていく視点が用意されていることである。これはナラティヴ的探究として繰り返して語り直す中で気づきを深めていくために非常に重要なアプローチの方法であると考えている。



ディニンの統合とひび割れが大事という言葉<sup>16</sup>を念頭に置き、本稿での気づきを次の糧としたい。

### 3 学生との対話 — 心の奥深くに凝こっている「ドミナントストーリー古い物語」と再会し、物語を書き換える

#### 3-1 概要

##### 3-1-1 その第一歩を踏み出せない胸のうち

きっかけは、A さん<sup>17</sup>の「アルバイトをしてみたいけど相変わらずその第一歩が踏み出せない」という話だった。以前日常対話の延長でアルバイトの話はしたことがあった。その時はどこかいアルバイト先はありませんかという相談だったと記憶している。結局今も見つけられずにいるのだと、最初は私も、そういうことなら今自分が紹介できる働き口はないだろうかということくらいしか考えずに気軽に受け答えしていた。

しかし改めて聞いてみると、A さんはアルバイト先にいるであろう他者、それも年上の存在に随分と身構えているようだった。どうも大学入学直後に始めたアルバイト先の上司の態度が理不尽で、身体的な拒否反応が出たために1ヶ月ほどで続けられなくなった経験が災いしているらしい。その話は私の中で、A さんが以前話してくれた最初に入学した高校の先生とぶつかり、入学早々退学したという話と重なった。どちらも年配の男性で「エラそう」で、「上から『正しい』視点でマウントしてくる」、A さんにとって、権威的で恐怖の対象的存在となっているようだった。A さんにはこの「恐怖の対象」がトラウマのようになって、そのためにアルバイトすら自分の好奇心や衝動に任せて行動に移すこともままならない、何かひどく重いものが形を持たずにのしかかった状態を余儀なくされているのかもしれないと、ここから少し心配の矛先が変わっていった。

##### 3-1-2 自分の正直な気持ちを親に言えない

「でもそれってさ、どこかで勇気を出して一歩踏み出さないと、アルバイトどころか就

16 統合 (destruction) とひび割れ (integration) は、日本臨床教育学会第7回大会 (2017 年) シンポジウムでのクランディニンご自身による発言の中にあったキーワードである。クランディニンは、語りには integration と destruction の二つの方向性があり、この繰り返しこの二つを繋ぐものが対話であると述べた。その上で、クランディニンは「ヒビがあるからこそそこに光が見える、今まで聞こえなかった声が聞こえる」という意味合いの元で、destruction の状態から integration に向かうことの意味を imagination の重要性という観点から強調していた。

17 A さんは大学2年生、筆者とは1年生秋学期以降、すでに3回インタビュー対話を繰り返している。本稿で取り上げたのは4-6回目、2018年12月-1月 (2年生秋学期) の内容となる。

職もできなくなっちゃうね」という私の一言に、Aさんは迷わず「私、就職はしませんから」という答えを返してきた。声優になりたいという思いを以前から強く持っていて、その決意はもう揺らぐことはないという。私は即座に、やはり就職せず東京に出て俳優を目指す卒業間近の自分のゼミ生を重ねた。そしてAさんの口から父親母親の話題がよく出ること、とりわけ母親には何でも話しているような印象を持っていたことから、きっとその決意を家族も認めてくれているのだろうと思い込んだ。気軽な気持ちで「それを親御さんも認めてくれているならいいんじゃない。私のゼミの4年生にもそういう人いて、事務所に所属してアルバイトしながら生活始めると聞いている。」という言葉かけた。ところがAさんの返答は意外だった。父親も母親もその決意は知らないし、二人は今もAさんの卒業後は普通に地元で就職して生きて行くものと信じているという。その「揺らがない決心」について二人に語ったことは一度もなく、結果として「3年生になったら就職活動もしなければならぬ」のだという。

卒業しても就職はしない。その決意は揺らがない。でもそれを両親が認めてくれないこともわかっている。だから就職しなければならない。この二つの相反する思いにAさんはこの対話の中で改めて気づいたようだった。確かにAさんにとってこの問題に現実的に直面するのは、まだもう少し先となるだろう。2年生のこの段階ではまだその矛盾は現実問題として目の当たりにはならないに違いない。しかし私としては、本人がいずれ直面するであろうこのジレンマに、この段階で触れずにはいられなかった。それは何をにおいても、Aさんがアルバイトに一步踏み出せない問題と根の部分で繋がっていると考えたからだった。Aさんにも私のその思いを伝え、ここをゆっくり解きほぐしてみてもどうかと提案した。

### 3-2 対話の出発点 — 私の解釈：<sup>ドミナントストーリー</sup>「古い物語」との再会

#### 3-2-1 親の言う通りに生きるという安心感

声優になりたいという気持ちは「自分の思うように生きたい」という内的欲求の表れである。一方で「就職しなければならない」というのはどういう気持ちの表れなのか。訊ねると「親がそうしろと言うから」。「親の言う通りに生きなければならない」という思いに取り憑かれているように見えた。「内心に従って自由に生きたい」と「親の束縛に甘んじなければならない」の間で引き裂かれそうになっているのだと理解した。繰り返し何度訊ねても、「声優になりたい、なるんだ」という気持ちは揺らがない。でもそれを「親に言うことはできない」。「言ってもどうせ否定されて返ってくるだけ」だから。それゆえに今さら面と向かって相談する気持ちにもなれない。親御さんに逆らって自分の思いを貫いた経験はないのかと訊ねると、小さい頃はそういうこともあったが、いつしかそれができな

くなったという。特に反発心も持たずに育ち、駄々をこねた記憶はスーパーでお菓子を買ってもらえなくて泣いたことぐらいだった。小さい頃から母親が何でも決めてくれて、Aさん本人にはあまり選択の余地がなかった。母親には絶対の信頼を置いてきた。自分としても与えられてその通りにしたほうが楽だった。困ったら母親に相談し、その答えに従って安心する。その繰り返しを続けているうちに、やがて自分には選ぶ選択肢はさほど必要はなく、人に与えられていることが当たり前前の環境となった。Aさんにとって母親の存在は、自分を方向づけてくれる人生の自動安全装置<sup>ビルトインスタビライザー</sup>。そのような言葉が浮かび上がった。

### 3-2-2 私は私の求める道を歩んでいい

ところがAさんにはやがて転機が訪れる。最初に入った進学校が肌に合わず、結果として入学してすぐに高校を辞める道を選択する。Aさんが初めて自分で下したこの決断には、両親ともに反対だった。Aさんはこれまで自分の決めたことに大きく反対されたことはなかった。それだけにこの決裂は辛かった。そしてAさんはこれを境にして、心の深いところで「扉を閉ざした」と私は受け取った。Aさんにとってその状況は自動安定装置のスイッチを自らOFFにしたように見えた。私の解釈では、この時がAさんの根底を支えていた安心環境が崩れ、足元が不安定になった始まりだった。

学校に行けない日々の中で長らく悩んだ果ての決断であった。本当はこの深いところの変化に気づいてほしかったのではないかと私はAさんの話を聞きながら考える。しかしそれは実際、どのようなやり取りがあったか詳細には語られなかったが、Aさんにとって見れば頭ごなしの否定という形でしか現れてこなかった。この最後に勇気を出して下した選択を誰にも保障されないという環境こそが、何よりAさんにとって非常に大きなストレスになったのではなかったか。

その一方でAさんが自分で選んで転入したB高校は、生徒の自主性を重んじる、前の学校とは対照的な校風だった。大事なことは自分で決める。服装も遅刻も自分の責任。すべて自分で行う。学校生活すべてにおいて基本的に先生は口出しをしない。その代わり本当に困ってしまった時は先生が出てくる。陰で支えてくれるのが大人で、主役はあくまでも生徒。そのような高校だった。Aさんにとっては革命的な生活環境の変化となった。大事なことはほぼすべて誰かが決めてくれて自分はそのレールに乗っかっていればよいと思っていた人生には別の可能性が開かれていた。自分は自分の人生を生きていい。それを教えてくれたのはこの二つ目の高校に他ならなかった。

### 3-2-3 考察：「私の解釈」を対象化する

私は8年前まで高校の教員で、生徒の自主性をどこまで尊重するか常に悩み続けていた教員の一人でもあった。同時にAさんの親御さんと同世代で今まさにこの話に出てきた同じ年頃の息子もいる。自分の経験と身の上を重ねながら、Aさんのライフストーリーを複雑な思いで聞かざるをえなかった。今私が聞き取っている「声優になりたい」という熱い思いが芽生えたのも、人生の転機を迎え、親の呪縛から逃れて出会った自由な生き方に引き寄せられていったこの時期と重なっているようでもある。心の奥深くでは安全装置を外された精神的に不安定な環境の中で、表面の劇的な変化によって私は私の生きたいように生きるんだという思いが日ごとに募っていったAさん。その延長が今の大学2年生のAさんなのではないか。

Aさんを支える根の部分が不安定な状態のまま、根無し草のようにして自分の中に新しく芽生えた思いだけがぐんぐん成長して今に至るという姿をイメージする。Aさんはこの数年来、このグラグラとした足元の不安定な環境の中で常に不安に苛まれながら、表面的にはそれに気づけないまま、表裏のバランスを欠いた状態で長らく生活してきたのではないか。アルバイトに第一歩を踏み出せないという思いの根底にあるものは、この一つの現れである。新しいことにチャレンジしようにも心のどこかにある不安が邪魔をして一歩踏み出せない。「声優になりたい」を親に言えないのもこの根の部分の声にならない叫びが災いしてのものではないか。

私自身が自分の中に抱え込んでいる<sup>かげ</sup>翳と同じようなものかもしれない。Aさん一人ではすでに解決しがたい思いが<sup>かげ</sup>翳となって、心の奥深くに<sup>こころ</sup>凝っている。

もう少しAさんと時間をかけて対話をし、その根源の部分に触れてみたいと考えた。

### 3-3 半構造化インタビュー(1)：「幸せ」の定義を問い直す

Aさんがアルバイトへの第一歩を踏み出せない理由の根源にある「言葉にしがたい思い」にもう少し深く踏み込んでみたいと、後日改めて半構造化インタビューを試みた。その中でAさんが受講している私の授業の内容に触れながら自然に出てきたのが、Aさんが持論として持っているという明確な「幸せ」観の話だった。以下一部を抜粋して紹介する。発言の冒頭にある数字はその日の発言の通し番号である。

#### 3-3-1 対話より

荒 40 自分の夢を追い続けたいっていうのは、純粹に自分の信念に従って、自分の思い描いた精神生

活っていうか、自分の信念を全うしたいっていうそういう気持ちの表れていうことかな。それに対して親御さんは理解してくれないっていう。親御さんに言ったことある？ 沖田さん、新撰組のように生きたいって。

A 41 ない。私が沖田さん好きなのも知っているし、新撰組のことめちゃくちゃ好きなのも知ってるし、土方さんの話で大号泣するのもママ知ってるんですけど、特にそういうこと話したことはない。多分めちゃくちゃ好きなのは知ってます。

荒 42 お母さんの発想では、それは絵空事っていうか、現実になんかの置き換えたって、幸せにはなれないでしょみたいな。

A 43 幸せになりたくて生きてるわけじゃないんで、私。

荒 44 お母さんは幸せになってほしいんじゃないのかな。

A 45 まあ親はそう思ってるんじゃないですか。私は別に幸せになりたいから生きてるわけじゃない。

荒 46 お母さんが娘のやりたいようにやってもらっちゃうと、あの子は不幸になってしまうみたいな、それは絶対に阻止しなくちゃみたいな。

A 47 だからママが成功した人だから言ってるんですよ。私も多分高校の時に不登校になってなかった時に、中学校時に、私一回いじめられたことがあって、マイナスなことがあったから、全部が幸せじゃなくていいんだって思ったんです。小学校まではそれこそずっと成功人生を考えていて、いい大学入っていい会社入って、結婚してみたいなことをずっと、ママもパパもそうだからそれが普通だと思ってたんですけど、一回嫌なことあったら、そうじゃないって思うようになって、そっちこそ夢物語なんだって思うようになって、だってずっとプラスな人生なんてないじゃないですか。今なんかイケイケゴーゴーなんて人たちは石油王ぐらいじゃないですか。私別に石油王になりたいわけじゃないんで、平民でいいんで、農民でいいんで。だから私新撰組が好きなんです。農民上りの人たちがそこまで立ち向かったから。教科書にはあまり載らないけど、今だって人気じゃないですか。あの人たちって別に武士の生まればかりじゃなくて普通に平民の人もいて、中であそこまで立ち向かった人たちが、一般人から特殊なところに上がった人たちを見て、ああ幸せにならなくてもいいんだって思ったんですよ。私も特殊なのかもしれないけど、99%バツでも1%幸せだったら、終わりよければす

べてよしみたいな。

荒 48 よくこの話をさ、豊かな時代に育っている親御さんが今こうやって不況の時代を乗り越えている時代に子育てしているわけで、多くの家庭で起こっていることなんじゃないかって。子どもにとっては夢物語を押し付けられている感じがしちゃって、親御さんにとっては成功している私の言っていることは正しいのにみたいなの、このすれ違いが今の時代の特徴なのかなって。親御さん世代の人たちがみんな成功しているわけじゃないけど、もちろん東大生のお母さんとかテレビに出てて、自分の子育てを押し付けた結果上手く育ったみたいなのさ、感じの人っているけど、私が話を聞いている普通の大学生を送っている人の中に、例えばエリート出の親御さんがいるわけで、その人の話を聞いていると、たいてい子どもは困ってるよね。小さい頃は神童で、だからこそ期待されちゃって、その期待に応えられなくなっちゃって、ある時、学校で何かあったりとかして、その時に自己否定感が増しちゃって、それで親御さんたちもフォローしてくれないから、困ったわねみたいになっちゃって、そうするともう誰も救いようがなくなってしまうって。そういう話はよくあって。

A 49 まさにそれなんですよ。

A 51 小学校の時ってチャレンジとかめっちゃ頑張ってたし、テスト100点が当たり前みたいなの。100点以外はありえないよねみたいなの。小学校の時ってあるじゃないですか、成績いい子の方が優遇されるみたいなの。そんなにすごいカーストではないし、テストの点数が何かに影響するとかそういうわけではないけど、あれで全部丸つかないとおかしいって思ってたんですよ。一回追試になった時は死ぬかと思いました。仲良い子も追試だったから良かったけど。昔男子と点数競い合って、負けて泣いたことがあります。点数取ってなんぼみたいなの。

荒 56 それははっきり親御さんが言われてるのか。

A 57 言われてないです。私が勝手に思ってるんです。強迫観念っていうか、パパも大学出てるし、別にすごい劣悪な環境で育ったわけじゃないから、それが正しいって思うじゃないですか。パパは先生だけお仕事して、結婚してが正しい生活だと思ってるから、小さい頃からそれも見てるし、おばあちゃんも看護師だったから、おじいちゃんは生まれる前に亡くなってるからわからないんですけど、いいお家なので、いい会社で働いていた人だから、悪い面を見なかったから、それが普通だと思っていて、いいものしか見てこなかったら、大学入るのが普通だって、北大に入らなきゃいけない、パパがちょうど北大で働いていた人だったから 北大に入らなきゃみたいになってて、ずっと。



荒 58 どうかでプレッシャーみたいに。

A 59 勝手に思っただけだったんですけど、

### 3-3-2 考察：「昭和的な価値観」への違和感を掘り下げる

ここで「幸せ」という言葉を最初に使ったのは私である。大学卒業したら就職をして社会人として自活をする道を選ぶ生き方を漠然と「幸せな人生」と言い表した。それは1980年代くらいまでであれば当たり前であったかもしれないが、今は必ずしもそのような人生を「幸せ」とは言わないだろう。今振り返ると私自身が無意識に、自分自身が授業で揶揄的によく使う「昭和的な価値観」に縛られていることを思い知らされる。

もっとも A さんを介して浮かび上がって来る A さんの母親もまた、私と同じような価値観で A さんに「就職」を求めていたということは、A さんの受け答えを通して伺える。そしてこの「昭和的な価値観」を A さんは真っ向から否定してかかっている。A さんが思い描いている「声優になって目立たなくてもいいから人のために生きていく」という人生物語よりも「いい大学入っていい会社入って、結婚して」という生き方の方こそが実現不可能な「夢物語」だと言っている。確かに A さんのイメージする究極の「夢物語」が石油王ということを考えると A さんの夢の方が実現可能なようにも思えるが、それでも「声優になって…」という A さんの思い描くストーリーもそう簡単に開ける道ではないだろう。なぜ A さんはここまで極端な発想で自分の生き方を主張するのだろうか。

そう思っていた中で出てきたのが、小学校の時に完璧を求められ（「強迫観念」でそう思い込んで）苦しかったという身の上話だった。本稿冒頭部分でも紹介した、授業に寄せられた学生の言葉が重なって聞こえてくる。少なくない数の学生たちが、見えないプレッシャーに苛まれ、ストレスで身体を悪くしたり他人を傷つけたりしていた。A さんも直接は言わないが、相当なストレスにさらされながら小学生、中学生を送ってきたに違いない。小さい頃は母親に従順だったというエピソードも重なった。本当は不安の只中で、いつかそのルールから外されることに怯えながら生きてきたのかもしれない。そのように考えればなおさら母親を自動安定装置として隠れ蓑にすることで、必死で自分を守ろうとしてきたようにも思えて来る。そして今、A さんが声を大にして私に伝えるのは、その母親が正しいと信じて押し付けて来る「夢物語」の脆弱性に対する強い批判である。対話の中で私は、これはもう A さんは母親と直接対決しなくては済まないのではないかと。そうでもしないと A さんはいつまでも自分の中に言えない思いを抱えたまま苦しみ続けるのではないかと考えるようになった。自然な流れとして、私は A さんに親御さんへの「宣戦布告」

を促すことになる。

### 3-4 半構造化インタビュー(2)：自分の気持ちをわかってもらいたいけど、争ってまではしたくない

ところがAさんは「宣戦布告」への思いなど、少しも持ち合わせていないようであった。それはAさんにその勇気がないからというのとは別の理由であった。私はそれを泣きたくなるような気持ちで聞いたことを思い出す。今振り返ると、私の言動がここを境に明らかに多くなっている。そしてこの後、Aさんの思いの根源にある「大切な家族に自分が自分で選択した道を認めてもらいたい」という気持ちを突き止め、対話の方向性が一気に動く結果となった。

#### 3-4-1 対話より

荒 95 戦っちゃえば。

A 96 めんどくせえ。その労力を違ったことに使った方がいくぶん効率的だろうって。

荒 97 もし上手くその気持ちが伝わらないで、結局すごい中途半端にも別れしちゃったらさ、ずっと引きずりそうだけど。

A 98 どっちみち引きずるから、だったらもの別れする方が楽かな。

荒 99 じゃあ直面对決するよりは、逃げちゃって、後からわかってもらう方が…

A 100 一回負けてるから。

荒 101 お母さん強いんだね。それは結構嫌な体験として残っちゃってるんでしょ。

A 102 だからもう話したことない。高校の進路の時だけど。

荒 103 それがちょっとトラウマ的な感じになっちゃてるんじゃないの。仕方ないなって。

A 106 今までずっとイエスだったから、そこに突然高校になってからノーが来たのが多分ショックだった。

荒 107 全部肯定してもらって来て幸せな毎日を送って来て、普通は中学とかであしろこうしろって、思春期、中2の時期とか、お父さんお母さんにとってみれば、何の気なしに、心配のあまりに言ったことかもしれないけど、人一倍敏感な A さんが人一倍強く受け止めちゃったっていうか。

A 108 自分の考えはダメなんだなって。

荒 109 それまでは自分はダメなんだって、そう言うことに気づけることはなかったって言うこと？

A 110 だってママの言うことに従っていればいいと思っていたから。

A 112 高校に行かなくなって、B 高に行って、そしたら自立する学校だから、自分で考えて行動しなければならない、時間割も自分で組むし、単位の管理も自分だし、チャイムも鳴らないし、遅刻したら自己責任という感じだから、自分でやらなきゃって手探りで二年間くらいやって、そしたら、声優やりたい、この学校に行きたい、東京行きたい、ってなった時に、自分の考えを言ったら、ダメって言われたから。

荒 113 なんか繋がりが見えて来たかな。それじゃ辛かったよね。批判能力が備わっていない天真爛漫な A さんが、柔らかいゆえに大打撃を受けたわけだね、無防備な状態で。B 高でその後その能力を少しずつ作っていったってことだね。でもそれは自分で作ってるから、本当に正しいかよくわからないからここまで来ちゃってるってからくりだね。って言うことは、自分のなかでちゃんと、B 高に入って試行錯誤を積み上げて来たってことが、こう言う風に生きていけばいいのかなみたいな。A さんの中で物語化されれば、あわよくば、お父さんお母さんに認めてもらうことができれば、完了かもしれないね。これが B 高に行かないで、ずっと引きこもったままとか、別の支配的な学校に通って我慢していたら、こんなにいい形で自分を育てることはできなかったかもしれないけど、B 高に行けて、自分の生き直しができてるわけだから、結構いい形で来てるんじゃないかな。ただ残念なのは、そのことを誰にも肯定してもらってない、誰かに肯定してもらってない。

A 114 友達は協力してくれるけど

荒 115 でも友達じゃダメなんだよね、やっぱり。その出発点のお父さんお母さん、こんなあなたがいつの間に大人の考え方ができて、私を超えたのねみたいなことを言ってもらえたら、浮かばれる感じがする。

A 116 目上の人に許諾書をもらいたいんですよね。

荒 119 A さんが求めているのは、やっぱり連れて言ってくれる人？

A 120 エンジンが欲しいんです。エンジンじゃないか、鍵？ 車のキーが。

荒 121 大人が渡してくれて大丈夫だよみたいな？

A 122 あとは自分でやる

荒 123 例えば私が鍵をあげても、借り物な気がする。やっぱり親なんじゃないの？

A 124 そう。多分親じゃないと途中で燃料切れするんじゃないかな。

### 3-4-2 考察：親が子どもが存在そのものを認めるということ

発言番号 113 を境に、私の思いは、A さんが自分の決めた選択をお父さんにもお母さんにもどうしたら認めてもらえるのだろうという内容にシフトした。この直前までは「宣戦布告」しか方法がないと考えていたのが、A さんが本当に望んでいることは自分の決めた選択を肯定してもらうということ以前に、今精神的に自立をして自分の考えで生きようとしている自分の判断を肯定してもらいたい、言い換えればその存在そのものを認めてもらいたいのだということに気づいたからに他ならない。A さんは過去の争いをすでにトラウマ体験のようにして記憶している。これ以上両親と争うことは、百害あって一利なしである。ただどうすればよいのか。すでに A さんとの対話は、どのようなアイディアを提案してもそれらは A さんにとっては何の現実味も持たず、対話は堂々巡りを繰り返していた。

林（2003）を読み、子どもに対する大人の仕事は何だろうと改めて自問していたということもある。「問題をつきつけて、子ども自身に、これでいいのかということ、考えさせる作業」「一つの意見（ドクサ）の中にある自己矛盾を問答によって引き出してみせる」。

この手続きを経て、子ども—私の場合は学生—が「ものの本質にふかくかくれたり、あるいは自分自身の生活の中に知識が根をおろしたりする経験」を引き出すための足がかりを提供することはできるはずだ (p.36)。大人しか見えないことがある。それを思ったままに言うことは、ただ相手に寄り添って言いたいことを言わないで同じ方向を見ている以上に大切になることもあるだろう。大人だって間違ふ。それはわかっているが、間違ふことを恐れて何も言わなかったら、それは実のある「対話」ではないだろう。一人の「大人」として、私も一歩踏み出す勇気が湧いてきた。

### 3-5 物語を書き換える — 逃げて寄り添って認めてもらう「新しい物語」

そしてこの後、対話の方向性は「新しい物語」の構築へと向かうこととなる。発言の内容からは読み取り難いかもしれないが、この対話の場そのものが、互いの話し方にせよ研究室内に流れる空気になせよ、非常にダイナミックな空間たりえていたことを覚えている。そのような場であればこそ、語ることで気づけた知がある。語り続けたからこそ見出された知がある。

#### 3-5-1 対話より

荒 127 この前お父さんの話出て来たけどさ、かなりあのバイトの人に近いのかな。やっぱり驚異的な存在というか、この辺にいる人みたいな。この人に認められたいのか、それとも身近な人に認められたいのか。

A 128 本当はどっちも欲しいですけど。昔小っちゃい頃に野球パパが見ていて、別に野球のプレーに対して怒鳴っただけなのに、自分にされたと思って泣き出したことがあるらしくて。自分でもちょっと覚えてるんですけど。

荒 129 すごく敏感なんだろうね。もともと性格的に。

A 130 めちゃめちゃ小さい頃なんですけどね。小学校行っているか行っていないかという頃の。でも全然自分には怒鳴られてないんですよ。私が後ろ向いてたから。

荒 131 小さい頃の A さんにとってお父さんは自分の絶対的な存在だから、お父さんの声はみんな自分との関係だと思っていたからなのかな。

A 132 どういう経緯だったかは覚えてないんですけど、それだけは覚えてる。

荒 133 もしそれが高校の時のトラウマ体験の話に繋がって、親御さんに否定されるのが怖いというのが体験の一つだったとしたら、これもプラスになっちゃうかもしれないね。そうなるとさ、逃げて気づいてないとまずい気がするんだよね。かといって思い切って言うておいでっていうと、トラウマ的なものだったとしたら、そんな簡単にはいかないんじゃないかなって。適正には自分で判断できないというか。

A 134 一回メールで話したことあるけど、面と向かって言ったこともないかもしれない。進路相談の時以来。

荒 135 メール返信はなかったの？

A 136 イエスともノーとも来なかった。

荒 137 私が話していてすごく感じたのは、お父さんお母さんに認めてもらいたいのは、進路のこととかは見えることなんだけど、見えないうちも大きいのかなって。自分の存在っていうかやっていることすべてを肯定して欲しいというか。声優になりたいと思ったのはAさん自身だし、そのことはすべて根拠もあって自分の中で説明できるストーリーがちゃんとあるわけじゃん。でストーリーそのものよりもそういうことをちゃんと大人として考えて、本当に本気で考えているということそのものを認めて欲しいのかなって。

A 138 あー…

荒 139 ジャあ例えば、東京へ行くことを許しました。じゃあ勝手にやりなさいって言われるのはやなわけだね。そこだと思うんだよね。東京で生活していることを認めてもらっているだけだから。勝手にやりなさいで済むんだったら、自分のやりたいことができるわけだからそれで終わりのわけじゃん。でもそれだけでは絶対足りなくて、応援してもらわなくちゃ行けないわけで。で応援してもらうということは、自分のことをちゃんと認めてもらうということが付いているわけじゃん。だからそこが伴わないとこれは終わらない気がする。存在を認めてもらうということだったら、まず最初に進路のことじゃないことでできることがないかなって思ったんだよね。進路の話はまだしなくていいんだよね。別のことでなんかない？例えば、今はさ、買い物とかなんでもいいんだけど、お母さんが



こうしたいって思っているのに、Aさんは私は違うわっていうところでつついとお母さんに合わせちゃうっていうのはない？

A 140 私そういうのないので。

荒 141 そっからじゃない。私にも意思があるのよって。小さい反抗をさ。だって考え方が違うわけだよね。お母さんとAさんは。お母さんはどっかであたしたち親子は似ているわ。私がやりたいことは娘もやりたいって言ってくれるしって、どっかで思っちゃってるかも。でそのような状態の中で「あたし声優になりたい」なんて言ったら「はあ」って思うに決まってるけど、間に何か置いて、ちょっとずつ、私と娘は違う人間なんだみたいな。そう言うことにお母さんが気づくことになったら、少し違ってこないかなって。って言うのはちょっと思ったんだけど、この問題ってAさんだけの問題じゃないと思うんだよね。お母さんの問題。お母さんいないから平気で言えちゃうんだけど。普通20歳くらいの娘さんだったら、自分とは違う人間で、親が思っているような人間ではないことに気付かなくちゃいけないんだよね。だから親の願った通りにいかなくても、どこかで手放さなきゃいけないし、応援しなきゃいけないし、それがまあ大人なんだよね。それがもし二十歳超えて自分と人格の違う人間がいるということを認められなかったら、その人に問題があると思う。だからやっぱりそこを育ててあげないといけない。割とこのインタビューしていると大体この話になっちゃうんだけど、子供の方が大人だねって。子供が親に気付かせてあげないとダメだねって話になっちゃうんだよね。私もそうなんだけど。私も息子の方がよっぽど大人だし。だからそうしたら決定的なことを言う前に、お母さんが子離れできるように、自分の意思をちゃんと明らかにして行くとか、そう言うプロセスが必要なんじゃないかな。

ほんと今そう思ったんだよね。やっぱりそう思う？子供の方が大人だって。認めたくないけど（笑）

A 142 多分荒波にもまれている世代だから。あたしたちの方が社会見えてるぞって思う。

荒 143 あたしもそう思います（笑） そうしたら本当にいい関係で離れて行くためには、やっぱりそのプロセスが必要なんじゃないかな。やっぱ大変？ めんどくさい？

A 144 めんどくさい。

荒 145 女の子だからね。母と子は密着してるから。お母さんはあんまり苦労したことないんだっけ？

A 146 聞いた話ではめっちゃめっちゃ苦労話は聞かないですね。

荒 147 お母さんはお母さんとの関係はどうなの。お母さんが反抗しない人だったとか。

A 148 おばあちゃんが夜勤とかで家にいなかった人だから、早々に自立なされてた感じが。

荒 148 そこなんじゃないの。本当は寂しいんだろうね、お母さん。お母さんは小さいころ親に構ってもらえなくて寂しくて、子供ができたらちゃんと育てなきゃ、私はそんな思いさせないわみたいな感じで、大事に育てられてきたんじゃないのかな。

A 149 パパいなくなったから余計だと思う。

荒 150 お母さんもどこかで寂しさみたいなものを持っていて、それを A さんで埋めてるんだよね。だから A さんが反抗しちゃうたり出ていっちゃうたりしたら、ぽっかり穴が開いちゃって、本当は自分で埋めなきゃいけないだよ。大人としても。でもそれが埋められない心の状態かも。それに気づこうとしないで、ますます存在が肥大化してるのかもしれない。

荒 151 一つの実験肢としては、最後までお母さんに夢を見させてあげる。結婚するまで。

A 152 結婚はしないな。

荒 153 結婚しなかったらずっと一緒だよ。結婚しなくてもいいんだけど、外出ていかなかったら。どこかで独り立ちしないとならない。

荒 154 そういう話なんだなって思った。進路のことをお母さんに言えないと言う話だったんだけど、お母さんに気遣い過ぎちゃって。いやあ大変だね、この時代に生きる娘って。(笑)

### 3-5-2 考察 本稿のまとめに代えて:新たな気づきを可視化する

この対話がおもたした利益は、A さんにとっては変えることのできない「壁」に他ならなかった父親と母親の存在を対象化したこと、そしてそれが元になって実際にその「壁」を崩す方策を話し合うことができたことではないかと考えている。これまでは自分の前に立ちはだかる強固なこの障害物に対して A さんはその内容にまで目を向けることはな

かった。一緒に話を聞いている私自身も同様であった。だからこそ「戦っちゃえば」と言う言葉を A さんにかけてののだと考えている。それが A さんによって父親の記憶が蘇ってきて「野球のプレーに対して怒鳴っただけなのに、自分にされたと思って泣き出した」「全然自分には怒鳴られてない」のに自分の記憶の中で父親を恐怖の対象としてきたことに気づいたこと、母のふるまいは A さんを必要としているからこそのものであること、そして何より自分自身が両親に対して見せている言動に何の不都合もなく、自分自身の捉え方次第で家族の関係は自分自身が動かせるものであることという「ナラティブ知」<sup>18</sup>を得たことで、一気に情勢が変わった。生産的な語りの場の中で、豊かな意味が見出された。

私が A さんの根底に見ていた、自分自身で抱え込んでしまった「不安定感」は、少なくとも A さん本人が自分でこしらえたものであったこと、自分自身の見方を変えることでそれは解消可能な揺らぎにすぎないこと、そして進路に関する自分自身の主張は、言い争って「その権利を勝ち取る」ものではなく、相手の立場を慮ることを通して、認めてもらおうとする行為の延長上にあるものであること、だからこそこの後の A さんの行動次第で消えてなくなるものであること、このことに気づくことができた。私が林 (2013) に背中を押されて試みる「大人」として、A さんに今後関わることがあるとすればまさにこの範囲となるだろう。

そのようにして A さんのふるまいと自分を重ねてみると、私自身にも思い当たる要素が多々ある。自分自身の言語化できない不安感に苛まれて、それを解消する代わりに目に見える自分の主張を強化していった。自分を否定する人や考え方に聞く耳を持たず、それらの人や意見をなかったことにして、ますます自分に固執していった。本当にすべきは自分の心の翳<sup>かげ</sup>に目を向けることだった。心の奥深くに凝<sup>こも</sup>って固まりきっているものを慎重に取り出して、その中身を調べてみることだった。

この対話によって「新しい物語」が見えてきたのは、何をおいてもまずは執筆者本人である。学生との直接対話や授業でのふるまいをそのつど振り返り、問題を対象化して言語化する作業の積み重ねは、私自身の鍛錬の場でもある。引き続き、学生との「開かれた学びあい」の実践を続けていきたい。

18 「ナラティブ知」については註 13 参照。

## 参考文献

- Clandinin,D. J.&Connelly,M. (2000) *Narrative Inquiry*, Jossey-Bass
- Erikson, H. E.(1994) *Identity and the Life Cycle*, W W Norton & Co Inc.(西平直監訳『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房 2011)
- Gergen,K.J. (1994) *Realities and Relationships*, Harvard University Press (永田素彦, 深尾誠訳『社会構成主義の理論と実践—関係性が現実をつくる』ナカニシヤ出版 2004)
- 林竹二, 竹内敏晴 (2003) からだ=魂のドラマ, 藤原書店
- 居神浩 (2010) ノンエリート大学生に伝えるべきこと——「マージナル大学」の社会的意義, 日本労働研究雑誌, 602 号 p.27-38
- Keen, Ernest (1975) *A Primer in Phenomenological Psychology*, Holt Rinehart and Winston (吉田章宏・宮崎清孝訳『現象学的心理学』東京大学出版会 1989)
- 鯨岡峻 (2005) エピソード記述入門, 東京大学出版会
- 西村ユミ (2014) 現象学的看護研究 理論と分析の実際, 医学書院
- 野口裕二 (2002) 物語としてのケア——ナラティブ・アプローチの世界へ, 医学書院
- 竹内敏晴 (1975) ことばが劈 (ひら) かれるとき, 思想の科学社 (引用は『竹内敏晴の「からだと思想」1 主体としての「からだ」』藤原書店 2013)
- 荒木奈美 (2016) 教師が自分の実践をどう振り返るかー学び続ける教師の自己リフレクション方法について問う (上) 自分の〈枠組み〉を壊し, 他者と出会い直すためにー, 札幌大学総合論叢, 第 42 号 p.77-97
- 荒木奈美 (2019) 大学教育のなかの「開かれた学びあい」をめぐるナラティブの探究 (1) —表現アートセラピー体験から得た, 教師が学生と「対話的」に関わることの意味—, 札幌大学総合研究, 第 11 号

本研究は, JSPS 科研費 17K18663, および平成 29 年度札幌大学研究助成制度 (個人研究) の研究成果の一部である。